論 説

農作業の科学の地平

足立原 貫*

The Horizon of the Science of Farm Work

Toru ADACHIHARA

「日本農作業研究会」が「日本農作業学会」と改称して、2年半を経過した。この間、春秋の講演会も、会誌の発行も、従来と変わりなくおこなわれ、全ては、“これまでどおり”であり、まさしく“改称”だけのものであったかのようである。しかし、それでよいのか、との自問がこの小論執筆の動機である。

たとえば、一見“これまでどおり”であっても、会員間の論議や、それぞれの研究の姿勢に、ひいては会の空気の底流に、“これまでどおり”ではない動きがおこるべきではないか、という主張をこめた問いかけをもって、「農作業学」形成への地平をさぐる考察を、自明なことでとされてきている「農作業」の検討から始めてみよう。

1. 「農作業研究」が、既成の多くの「学」に根ざすそれぞれの専攻領域をもつ研究者たちによる、multidisciplinary な研究の枠組であるという合意の上で、その研究者たちや研究周辺者たちに研究交流の場と機会を提供する Society が「農作業研究会」であった限りにおいては、避けて通れたことから、真正面から取り組まねばならなくなったはずである。

宗教団体にまで「学会」の名称を付すものがあり、他にも、安易に「学会」の看板をかかげる同好会的集団が巷に続出するインテリ状況・時代状況ではある。だが、だからといって「農作業学会」も、この時代の風潮に乗っただけのものであった

り、「研究会」では軽く見られがちだから、「学会」に看板替えをただけのものだ、とされるようなことであってはなるまい。

そもそも本来の「学会」としてあるべき形と内容を有する Society であるからには、その核となり対象となる「学」の形成が先行しているか、あるいは、少なくともその形成が推進されつつあるというのが、「学」を求め「学」を展開する知性の営みの常道であろう。しかし当事者たちが、対象にしようとしている「学」そのものに対する概念の整理や認識のしかたの確立がないまま「学」を名のり、「学会」の看板をかかげている例が多いというのが実状ではないか。それゆえにであろう、それぞれの「学」の名称の枠組や場の中にありながら、自らの研究の標題に「〇〇学的」という冠を付して、すでに自ら、目ざすべき「学」の構築の一端を担う努力を放棄し、既成の「学」の“権威”のカサの下に入って、その既成の「学モード」を自認しているような「研究」が横行することとなる。我々の“Society”にあっても例外ではなかった。

2. 「学」として、その形と内容を整えている独立した「学」には、それぞれ、他の「学」とは異なる独自の“領域”がある。その独自の“領域”を持ち得ねば、独立した「学」たり得ない。“領域”は、その間口と奥行によって明確にされるが、奥行はそれぞれの「学」の進展によって深められ、究められていくものであり、奥行が不明・未知な

昭和63年10月4日受理

* 富山県立技術短期大学 富山県射水郡小杉町黒河 〒939-03

TOYAMA PREFECTURAL COLLEGE of TECHNOLOGY Kurokawa, Kosugi-machi, Imizu-gun, Toyama, 939-03

ればこそ、その「学」の存在の基盤が、より確かなものとなる、という逆説の妥当性がある。そこで、「学」の領域を明確にするのは、その間口である。それぞれ独立した「学」たり得るその領域を示す間口となるのは、それぞれの「学」の名でとらえられ、それぞれの研究の対象となるべき「現象」にはかならない。

あらためて確認するまでもなく、研究は、現象をとらえるところから始まる。とらえられるべき現象がないところに研究はない。現象をとらえて、観察、記録、解析、思考、を重ね、その現象を生じさせている法則性を探り出していく。

在来の現象の調査によって得る事例、あるいは、新たな現象をおこしてみる実験という操作で得るデータ、幾多の手法の違いはあっても、そうして得られるさまざまな結果を解析し、思考を重ねる。その営為によって集積される知識を素材として、「学」は形成・確立されていく。「目的達成の手段の体系」と定義づけられる「技術」に対し、「学」は「認識された法則の体系」と定義づけられるゆえである。

物理現象をとらえて物理学が形成され、生理現象をとらえて生理学が形成され、心理現象をとらえて心理学が形成され、経済現象をとらえて経済学が形成され、社会現象をとらえて社会学が形成され、等々、人間が認識し得る諸現象を、その認識のしかたをも包括して対象とし、さまざまな「学」が形成されてきたということは、それぞれの経緯が示しているとおりである。

3. 「農作業学」を名のる独立の「学」の形成を図るため、その射程内にとらえられるべき現象は、言うまでもなく「農作業現象」でなければならない。そこで、何にも先立って「農作業」の概念規定が不可欠である。すなわち、「農」の営為にかかわる人間のさまざまな所作のうち、何を「農作業」とし、どの範囲までを「農作業現象」としてとらえるか、という明確な概念規定が「農作業」を対象とする「学」の出発点であり、「農作業学」構築の礎石となる。

ところが、意外なことに、「農作業とは何か」を問いつめて、明確な概念規定をしてある文献・資料は見当たらない。「農作業」は自明の事柄として、わざわざ定義するまでもないこととされてい

るのか、農作業を課題とする多くの論述は、「農作業」の明確な概念規定がないまま、農作業の意義や役割、農作業の特徴、に始まり、具体的な現場作業の解説で終わっている。そういう中で、定義めいたものがあったとしても、それらは、いずれも「一般に農業経営体のなかでは各種各様な作業が複雑な形で結合され、実施されているが、これらの作業は直接・間接にすべて農業生産に関係している。これらの農業生産に必要な作業を総称して農作業とよばれている¹⁾」を超えるものではなく、多くのものは「農作業とは、農業生産に伴う一切の労働行為である」というようなふれかたで終わっている。

意外な、といえはさらに意外なこと、というより、むしろ驚くべきことに、「農作業」という語は、農業関係者の間や農学界では、古くから普通に使われていたはずであるのに²⁾、独立した語として「農作業」が、日本語の辞典に登載されたのは、ごく最近のことなのである。それも、極めて限られた二、三の辞典に、やっと出てきたというのが実状である³⁾。

どうやら、「農作業」は、日本語の通常用語としての「市民権」がないまま、長年月、「農作業」を自明の事柄としている人々にとってだけの、特殊な用語であったようである。

4. いまにして「農作業」の概念規定を明確にしなければならないというのは、「学」の厳密な形成のためばかりではない。

「農作業」の存在の前提となる「農業生産」の様相が激しく変化し、生産方式の工業化がますます進行する過程で、かつて「農作業」のイメージ形成の主役であり、実質、農業現場の作業を表現する代表的な用語であった「農耕」の影が薄れてきている。こういう文明状況下で、「慣行農作業」を主たる対象として出発した研究は、しだいに、その研究対象を失っていくこととなる。

機械化・施設化の一層の進展により、「農業生産」の名においておこなわれる現場の作業の様相は、工場工業の現場における作業の様相や、土建工業における作業の様相に限りなく近づいていく一方、生物を扱う工業の著しい進展がある。もはや、「生物を対象としている」あるいは「季節や天候、自然の制約を受ける」といった生物や自然

条件を切り札にしての“ただし書き”つき説明だけでは、「農業生産」や「農作業」の特徴をカバーするのは無理になってきている。

水稻の収穫調製の場合を例にとってみても、その作業のかなりの部分が農家の手を離れて工場工業化しており、他方、園芸や畜産の部門におけるアグリ・インダストリアル化の実状は、つとに知られているとおりである。

こうした状況の中で、「農作業学会」の看板がかけられたのである。決して安直な動機でなく、それなりの衆知を集めて議論をつくした果ての、「看板替え」であろうからには、おくればせではあっても、いまここで「農作業」そのものを問い直してみなければなるまい。あらためて、「農業生産」とは何かを考え、その営為にかかわる「農作業」の概念規定を、明確にしなければならなくなったのである。

5. 人類が生存していくための基本営為である「生産」を問題にするとき、これまでに常識化している手法は、「一次生産」と「二次生産」という分類や、「工鉱業生産」と「農林漁業生産」という対比に基づくものであった。

しかし、その常識を超え、素朴な疑問への回答を引き出す形で、同じように「生産」と言われているそれらの一つ一つをあらためて考え直してみると、「農林漁業」に対比して「工鉱業」と一括される「生産」も、原料や材料というモノを機械・装置・施設を介して製品という別なモノにつくり変えていくことを主軸とする「工業生産」と、採油・採炭・採鉱という地下からの天然資源の採掘を主軸とする「鉱業生産」とでは、その過程の意味が著しく異なる。一方、生物を相手にしているからとして一括される「農林漁業」にあっても、本来、天然資源である魚介類の捕獲・採取を主軸としてきた「漁業生産」や、森林樹木の伐採・搬出を主軸としてきた「林業生産」と、植物の栽培や家畜の飼養を主軸とする「農業生産」とでは、その過程の意味が著しく異なっている。

すなわち、「生産」という一語で一括される人類の基本営為の一つ一つの内容を、素朴な眼で見直してみると、「工業生産」と「鉱業生産」とは同類のものではなく、「漁業生産」と「林業生産」は、天然資源の獲得という点で、本来、「農業生

産」よりも、むしろ「鉱業生産」と同類の性格をもつものである。それが、人工的な森林造成や栽培漁業にいたって、「林業生産」や「漁業生産」がはじめて「農業生産」に接近してきたのだと言えよう⁴⁾。

こうして見てくると、「生産」は、モノのつくり変えを内容とする「工業型」、天然資源の獲得を内容とする「鉱業型」、有用生物の育成・繁殖の操作を内容とする「農業型」に3分類されるが、「鉱業型」を、天然資源が存在する地中や水中や山中からの“モノの移動”と、とらえてみると、まさにモノの移動そのものである“輸送”、それをさらに“モノの空間的移動”ととらえれば、“モノの時間的移動”と言える「貯蔵」も、「生産」の営為ということになってくる。

このように、その内容も意味も著しく異なるいづれの過程をも、「財の投入と産出の流れ」という認識のしかたによってとらえて「生産」を定義づけると、上述の営為は、全て同じ「生産」の概念に包括されてしまう。経済学は、そういう視点をもち、そのことを教えている。

6. 前項の考察を経て確認できることは、その様相や方式の工業化がどれほど進み、あるいはまた、かつて「農業生産」の範囲と目されていた過程に「工業生産」の過程がどれほど大きく食いこんできても、消えることがない「栽培」・「飼育」という過程とその営為こそが、「農業生産」である、ということである。

そこで、「農作業」は「農業生産」の実現過程の所作であるととらえる限り、植物の栽培や家畜の飼養にかかわる作業こそが「農作業」である、ということになる。しかし実状はそうではない。

たとえば、一般の農家がおこなう水稻作の場合、イネという植物を扱う圃場における作業だけではなく、収穫・調製の段階になって屋内におけるモミを扱う作業、さらにはコメにいたる作業までも、ごく当然のこととして「農作業」の範囲に入れているであろう。

ところが、ライス・センターにおけるような工場化した作業場でのモミやコメを扱う作業を「農作業」とは言わないであろうし、あるいはまた、モミやコメの運搬を農家がおこなっていると「農作業」の範囲と考えられても、それを農協職員が

集荷・運搬する場合は「農作業」とは言い難いであろう。ここで、先述の「……農業経営体のなかで……これらの農業生産に必要な作業を総称して農作業と……¹⁾」が思いおこされる。

つまるところ、「農作業」を「農家がおこなう作業」あるいは「農場でおこなわれる作業」と定義づけるならば、諒解できるということになる。しかしそうすると、「農作業」を研究の射程内に据えるとき、「農家生活」あるいは「農場経営」「農業経営」をとらえる視点が、研究の主軸となる。それは、すでに「労働科学」や「経営学」という「学」が農村・農業分野を対象にした場合におこなってきていることである。もしも、「それでよいのだ、農作業の研究は、それらの“学”の“サブ”なのだ」と容認してしまうのであればそれまでであるが、いまや「農作業研究会」ではなく、いやしくも、独立の「学」を標榜する「学会」の旗を上げたからには、「学」に対する安易な姿勢はゆるされるべきではない。

「農作業研究会」の発足当時、そしてその後、かなり年月を経てからも「さまざまな領域の研究者はもとより、研究者以外の現場関係者や農家の人たちにも参加しやすいように、用語の規定などあまり厳しいことはしないほうがよい」という類の発言が強くあったが、その意味することと、そのねらいへの対応や、あるいは、一つの「学」のうちにおける研究課題の自由の問題などは、本稿で問題にしようとしてきたこととは、全く別の系譜のものである。

7. 「農作業」の概念規定をめぐる論議を始めてみたが、制限紙数を超えるので、火つけ役の責を果たすため、一つの考え方を提起して、ひとまず本稿を結ぶこととする。

先述した水稲作の場合の例で、コメに続く変化を加えて、作業段階別に变化するモノの流れを示すと下記のとおりである。

この変化を生じさせる作業は、その作業場所によって「圃場作業」「屋内（施設内）作業」「工場作業」「家事」、その作業内容を示すようには「栽培」「調製・加工」「調理・炊事」「製造」

などと称されるが、作業の移り変わりの過程におけるモノの変化は決して→印の一方方向だけではなく、イネとモミの間は、イネ $\longleftrightarrow$ モミ、のはずである。

そこで、こういう循環の可能な段階の実現過程に「農作業」があり得て、そうでない段階の作業は、工業過程に組みこまれていくものではないか。

注

- 1) 川延謹造（昭和41年）農業機械化技術、27頁、養賢堂
- 2) 日本農作業研究会が発足した昭和40年の、はるか以前から「農作業」の語は使われていたことは言うまでもない。しかし、農林省農試における農作業研究室の設置や「農作業」の語を付した文献・書籍の発行をたどっていくと、確かなところ、昭和10年代までには至るが、それ以前になると、「農業労働」の語のもとに埋没しているようである。田植作業や刈取作業や脱穀作業などと個別に呼ばれていたものを総称する「農作業」が、いつ、誰によって使い始められたのかは、今後の調査にまつ。
- 3) 広辞苑（岩波書店）の第2版補訂版第5刷（昭和55年）に、「農道」などの項目の説明文中で「農作業」の語が使われているが、「農作業」という独立の項目はない。下記の10点の辞書にも、「農作業」の項目はない。国語辞典・初版第115刷（昭和48年、三省堂） 大言海・新訂33版（昭和44年、富山房） 辞海・第16版（昭和36年、三省堂） 言林・第3版（昭和35年、全国書房） 国語辞典・初版（昭和35年、旺文社） 角川国語辞典・第38版（昭和46年、角川書店） 類語国語辞典・初版（昭和60年、角川書店） 詳解漢和大字典・修訂増補63版（昭和33年、富山房） 大明解漢和辞典・初版（昭和35年、三省堂） 広漢和辞典・初版（昭和57年、大修館）
「農作業」が独立した項目として登載されたのは、下記2点の辞典が最初とみられる。日本国語大辞典・初版（昭和50年、小学館） 国語大辞典・初版（昭和56年、小学館）
- 4) 足立原 貫（昭和62年）道標はない、135頁、ぎょうせい